

論 文

「軍事郵便文化」の形成とその歴史力

新井 勝紘

1 テレビ番組と全国切手展でとりあげられた軍事郵便

2010年、戦場と銃後を結ぶ貴重なコミュニケーション手段でもあった軍事郵便について、私に関わったものだけでもNHKのテレビで三つの番組でとり上げられた。一つは朝のニュース番組の「おはよう日本」(3月6日)で、専修大学歴史学科の私のゼミでの活動に焦点をあてて取材されたもので、70年近く前の軍事郵便を、兵士とほぼ同じ世代の若者が、悪戦苦闘しながら解説に取り組み、さらにその手紙の筆者で、戦争体験者である方を、横浜のご自宅まで訪ねて行ってインタビューを試みた調査活動に密着して、TVカメラがまわったのである。

また、同じNHKで、夜の硬派の番組でもある「クローズアップ現代」で、軍事郵便解説に取り組みゼミ風景が撮影され、8月3日に放映された。さらに同月15日(終戦記念日)の深夜、戦争特集としての2時間にも及ぶ特番が生まれ、「戦地からの手紙」というタイトルで、高校生や大学生がどのように軍事郵便に取り組み、そこから何を学ぼうとしているかをテーマの一つとして番組が作られた。どの番組も、ある特定の人々の軍事郵便で、これまでに紹介されたことがないものに焦点をあて、その中の一部を番組中に読むという画面が登場する。70数年前の兵士の手紙を改めて読みこんでみることから、何が見えてくるのかをねらったものだとも思われる。それも俳優やアナウンサーにまじって、10代~20代の若者に読ませることを試み、初めて読んだ学生にとっても大きなインパクトはあったのではないかとも思う。

それでは、いまなぜ、軍事郵便なのだろうか。この問題についてここで少し考えてみたい。

ところで、軍事郵便についての研究は、ある分野では相当の蓄積があることはわかっている。これも私が体験したことだが、2009年10月に、財団法人日本郵趣協会によって開催された第44回「JAPEX '09」(全国切手展 主会場は池袋のサンシャインシティ文化会館)に、切手のレギュラークラスやワンフレームクラスに混じって、「軍事郵便展」が併設された。事前に、このテーマで展示を行いたいのだが、そこに私の研究室の活動や所蔵の軍事郵便を展示してもらえないかとの依頼があったのである。44回も継続して行われている伝統の全国切手展なるものについて、私はほとんど認識もなかったのであるが、ゼミ所属の学生に学外での展示を経験させたいという思いもあって、多少の不安を抱えながらではあったが、参加することにした。

間もなく、この切手展は全国にいる多くの郵趣ファンが、自慢の作品を公開する伝統のあるイベントであることがわかったのであるが、それにしても切手とは別に軍事郵便に光を当てて、特別のコーナーをつくるということになったのには、軍事郵便に対する認識度が上がったということにもなるのではないかと思うと同時に、私がこれまでまったく個人的に収集してきた軍事郵便を、はじめて学外で紹介できる絶好の機会でもあるという思惑もあって、積極的に取り組むことにした。

展示オープンの前日、会場に展示された私以外の軍事郵便の多くは、一通一通、リーフという形にして葉書や封書すべて表書きが展示されていたことに、私は大きな衝撃を受けた。封書

の場合は封筒の裏書も展示されていたが、その手紙にどのような内容が記されているかについては、展示ではまったく見る事ができない。ここでは中身には焦点があたっていなかったのである。この展示での焦点は軍事郵便で最初に使用された日付印や、各地の野戦郵便局の印影、日付、印色、差出または宛先部隊など「エンタイヤ」がメインであった。この展示を通観すると、私のような歴史研究として軍事郵便をみているのとは異なる、ある特異なジャンルがすでに構築されていることがわかり、またその蓄積も長年にわたって継続されており、豊富にあることも理解できた。

それでも、今回の展示のタイトルは、「日本軍事郵便史」となっており、日清戦争から第2次世界大戦までの各時代ごとに年代順に展示されており、かなりの量のリーフが所蔵者や提供者の名前入りとなって展示されていた。主な展示は、国内外から23作品、13名からの逸品コレクション、さらに軍事郵便研究の泰斗である故大西二郎氏を追悼する意味での関連の資料、ていば一く（郵政資料館・通信総合博物館）から軍事郵便関連資料、また長年軍事郵便を収集保存してきた軍事郵便保存会所蔵の貴重な軍事郵便などであったが、それらと並んで、私の研究室所蔵の軍事郵便と関連資料が展示された。この伝統ある切手展に歴史資料としての軍事郵便展示を加えてくれたことの意味は大きいものがある。

この展示の全貌は、〈JAPEX '09〉記念出版 Military Mail 『軍事郵便』（発行 財団法人日本郵趣協会 2010年3月31日）に詳しいが、その書の「はじめに」で協会の理事長の福井和雄氏は次のような挨拶をされている。

「このところ「郵便史」の中でも、「軍事郵便」への関心が高まっています。それは「軍事郵便」が、このように「高度に知的」で「かけがえのない」対象である価値を持っているからに違いがありません。「元気です」と戦地から届いた1通の葉書にも、「郵便史」として云々する以前に、多くの人たちの万感の思いがこもっているのです」と、万感の思いがこもった軍事郵便への注目の意味について語っている。さらに「日清戦争（1894～95）に始まり第2次世界大戦（1945）に終わる50年間のわが国の「軍事郵便」の歩みを紹介」と、この展示の意義について述べている。これまでの郵便史研究にとどまらず、戦時期の兵士たちの「万感の思い」に目を向けることの大事さを述べている。

さらに、ショーケースたった一つの展示ではあったが、表書きや印影あるいは日付などではなく、軍事郵便そのものの具体的な内容にも、少し踏み込んでみた専修大学新井ゼミの展示に対して、主催者の一人である玉木淳一氏から、「軍事郵便の文面に着目したもので、その研究発表は郵趣家にも新鮮に受け止められ好評を博した」（前同書 玉木淳一「あとがき」）との評価をいただいたことに、この切手展に参加した意味があったと私は総括している。この展示をきっかけに、軍事郵便への関心が高まり、戦時の手紙を内容も含めてもっと複眼的にみる視点が大事だという方向に向ってくれればよいと思っている。

② 映画「硫黄島からの手紙」と『きけわだつみのこえ』

軍事郵便への注目は、さらに遡ると、2006年12月に、クリント・イーストウッド監督のアメリカ映画「父親たちの星条旗」に続いて、その二部作でもある第二弾「硫黄島からの手紙」（「Letters from Iwo Jima」ワーナー・ブラザーズ映画）の日本での公開が、軍事郵便というものへの注目度があがり、映画の人気と相乗して一般的な関心が高まったのではないかと思われる。

この映画は、1944年、日本軍にとって戦況悪化のなか、陸軍中将・栗林忠道が硫黄島に最高

司令官として赴任し、アメリカとの9ヶ月余りの死闘を繰り広げた結果、日米双方ともに二万人余りの犠牲者を出して終わった硫黄島の闘いが舞台となっているが、物語は、硫黄島の地中から数百通もの手紙が発見されることから始まるのである。その手紙こそ、硫黄島で戦い、激闘の末、そこで死んでいった男達が、愛する家族に宛てて書き残していたものだったが、軍事郵便として海を越えて運ばれ、それぞれの家族に配達されることはついになかった手紙だったのである。事実、司令官の栗林自身は、少将時代に、自分の生家に宛てて一週間に三度も手紙を書いていたとの逸話がある人物であり、家の土蔵から約150通もの書簡が発見されてもいることから、戦場での軍事郵便には人一倍思い入れがあった指導者であった。彼自身、家族宛の軍事郵便が41通も残っていることが明らかになっている。

この映画の冒頭で描かれている地中からの複数の手紙は、硫黄島で戦った兵士の最後の思いが詰まった軍事郵便であったが、もはや船の発着も不可能になってしまったこの島からは、故里に“届かなかった手紙”となってしまった。こうした映画での叙情的な描き方が、映画を見た人々の間に少しずつ浸透し、戦地からの手紙に改めて関心が呼び起こされたといえるだろう。

こうして戦場からの手紙の再認識が起ったといえるが、さらに時代を遡ると、戦没学徒兵の手記や手紙について、大いに関心をよんだ時代があった。それは戦後間もなく刊行された複数の書籍の刊行から始まった。

まず最初は、東京大学出身という限定はあるが、1947年に全国的規模で集められた遺稿集として『はるかなる山河に——東大戦歿学生の手記』（東大学生自治会戦歿学生手記編集委員会編 東大協同組合出版部）が刊行され、大きな反響を呼んだ。そして、その反響に応えるように『はるかなる山河に』から二年後の1949年に、『きけわだつみのこえ』（日本戦歿学生手記編集委員会編 東大協同組合出版部）が発刊されるのである。全国の戦没学徒の遺書などのほかに、父母や兄弟に宛てた手紙や葉書を中心にまとめられたもので、全国から309人もの手紙類が集まり、その中から75人ものものを採録した。この本は20数万部ものベストセラーとなつていわれている。わだつみ会理事長の中村克郎は、その役割を「日本戦没学生の遺念を継いで平和を希い非戦を誓う民族の祈念のための、いわばバイブル的な役割を果たしてきたことは、衆目のみとめるところである」（第一集『きけわだつみのこえ』のあとがき）と述べており、多くの人々の心を捉えて、版を重ねた。また1950年と1995年に、同題名で映画化もされてもいる。その後、1963年には『戦没学生の遺書にみる15年戦争』（光文社「カップブックス」）が刊行され、さらに三年後の1966年には、この本が『第二集 きけわだつみのこえ』と改題されて刊行されている。

③ 海軍航空隊所属の戦歿兵士と戦歿農民兵士の手紙

一方、1943年9月、第十三期海軍飛行専修予備学生として三重や土浦の海軍航空隊に入隊した者は、5,000人にも及んだが、その同期生のうちの約三分の一は比島沖や台湾沖で戦没してしまった歴史がある。かれらのほとんどは、大学および高専を卒業もしくは在学中で、志願した学生であった。その遺族たちが戦後「白鷗遺族会」を結成し、450通余りの戦没兵士の遺書や手紙等を集めた。その中には日記あり、遺書あり、手紙あり、詩ありでさまざまな兵士の遺文があったが、そのうちの60余篇を1952年に出版協同社から『雲ながるる果てに』と題して刊行した。この本は、先に刊行された『きけわだつみのこえ』が、「思想的或いは政治的に利用されたかの風聞」（杉暁夫 前同書「発刊の言葉」）に対して、「当時の散華していかれた方々の気持はもっと淡々とした、もっと清純なものであったことを信じて」（杉暁夫 前同書）発

刊したといわれている。ここに掲載された若い戦没兵士の軍事郵便も、多くの人々の心を捉えたのである。その後この本は、1967年には仮名遣いを現代表記に改めて単行本（河出書房新社）として再出版され、1985年には文庫本にもなっている。

また、学徒兵ではない兵士の手紙については、岩手県農村文化懇談会が1961年に刊行した『戦没農民兵士の手紙』（岩波書店）がある。手紙を集める運動は1959年からはじまったが、一年半余りの期間で、728名分、2,873通の手紙を集めている。戦没兵士は岩手県だけでも、三万七千余名にのぼるといわれているが、集まった728名は、その2パーセントほどにあたる。それらの手紙は「仏壇の引き出しに、あるいは箆笥の奥深く、今は再び帰って来ない人の形見として」（『戦没農民兵士の手紙』「あとがき」）ひそかに残されていたものであったが、そこには、農村に生まれ育った農民兵士ならではの生活環境と農村社会が垣間見え、農民兵士独特の心情が吐露されていたのである。『戦没農民兵士の手紙』に掲載されたものは、そのうちの僅かであるが、「小学校卒、それも農業労働の多忙故に、予習や復習はおろか、早退や欠席などさせられ、その故に入隊後学課の面で泣かされた農民兵士たちには、また、みるみる昇級して将校になる学徒兵」（前同書「あとがき」）に対して、別の思いを抱いていたことが伺われるのである。

この本の編者は、農民兵士の手紙からは「学徒兵たちが、その戦争に疑いを持ち、批判を抱きながら死出の旅路に出たのにくらべ」、「ひたすら“君のため”“国のため”であることを信じて戦死していった」（前同書「あとがき」）ことが読みとれるともいっている。また、そこには「戦争の持つ意味を知らずに、知り得る機会を与えられずに、それ故自ら進んで死地に赴いたであろう健気さ」や、「わが身のあわれさをあわれさとも知り得ずに死んでいったあわれさ」（前同書「あとがき」）が深く流れていると、農民兵士の心情に寄り添った発言をしている。

このように戦没兵士といっても立場や出身地、出自などによっても異なるといえるが、戦争で犠牲になった兵士の手紙については、まず、戦没学徒兵への関心から始まり、その対象者たちは次々と広まって行ったといえよう。こうして、戦争が終って数年後、1940年代後半から60年代はじめにかけての15年ほどの間に、次々と戦没兵士の軍事郵便が活字化され、多くの人々に読まれるようになったのである。ごくごく身内内の個人的な遺書や遺文であったものが、ひとつの運動だったといってもいい活動の中で、刊行公開された意味は大きい。一通一通の手紙や葉書には、死ぬ間際の学徒兵たちや農民兵士のさまざまな思いが溢れ出ており、その文面から彼らの真情を読みとることができる。

この時期が、軍事郵便への関心が高まった最初のピークだったと思われる。もちろん、戦争のさなかでも、日清戦争期であるが、地方新聞などに戦地からの個人的な手紙が掲載されているケースがあることは、大谷正氏の『兵士と軍夫の日清戦争』（有志舎）で明らかにされている。また、日中戦争期でも、『日本出征学生の手紙』（革新社編 1940）、三上卯之介『絵と文の現地だより』（1940）や次に紹介する中村外喜雄『青年教師の戦線通信』などのように、個人的な手紙や従軍日記などが公刊され、発売もされていることの意味についても、再検討しなければならないだろう。

1942年3月に、石川県立金沢商業学校教師だった中村外喜雄は『青年教師の戦線通信』（明治印刷株式会社）を出版している。その序に中村は、「独蘇開戦による国際情勢の急変と、日米会談の雲ゆき不穏とが、再度御奉公の日近きを体にひしひしと感」じたことから、「せめて何か一つ、純粹であった軍人生活に於てかきとめた手紙、感想、日記代りの俳句等を一纏めにしておきたいと、此の秋頃から急に整理した」といっている。「今も尚、泥濘に塗れ、砂埃に頭から睫毛まで黄色くして果しなき大自然の寒暑と戦ひ、疫病と戦ひ、しっぽのない敵と対峙

してゐる戦友の御苦勞の一端でも、此の通信集から銃後の方々に知って頂き、内地と外地との緊密な結合の一助となれば望外の喜びです」といって、この本がどういう場面で役立ってほしいかを素直に語っている。内地と外地との緊密な結合のためには、銃後の人々が戦地の現実をリアルに知ることが大事なのであって、そのために敢えて自分の軍事郵便を刊行することにしたという。この本の読者がどの年齢層かは不明だが、中村自身は、卒業とともに入営しなければならぬ三人の教え子のために公開したことを述べている。教師からの「戦線通信」(軍事郵便)は、まさに戦時の真ただ中でも、このようにある役割を担っていたのである。

4 一般の兵士の軍事郵便の数

つまり、2010年のテレビ番組や映画「硫黄島からの手紙」、あるいは『はるかなる山河』からはじまり、『きけわだつみのこえ』『雲ながるる果てに』、さらに『戦没農民兵士の手紙』へと続く一連の出版物など、戦地からの手紙への注目は、凹凸がありながらではあるが、一般の人々にもそれなりに認知され、読まれていたのである。

私が1990年代から軍事郵便へ関心を持つようになったのも、こうした流れをある程度理解したうえでのことである。私自身が直接、軍事郵便に触れることができたのは、岩手県北上市和賀町の高橋家に所蔵されている数千通の軍事郵便を調査する機会ができてからであるが、北上市のまったくの個人の家で、それも7,000通もの軍事郵便をなぜ所蔵しているのだろうかという単純な疑問からはじまった。この手紙については、すでに地元の岩手で、1983年に菊池敬一著『七〇〇〇通の軍事郵便——高橋峯次郎と農民兵士たち』(柏樹社)が、翌1984年には岩手・和賀のペン編『農民兵士の声がきこえる——七〇〇〇通の軍事郵便から』(日本放送出版協会)が発行され、農民兵士の手紙の発見から、解説、分析に取り組んだ成果として、農民兵士の手紙の内容を紹介している。

この二冊の書があったからこそ、7,000通もの軍事郵便が個人宅に保存されていることも知ることができ、当時、私自身の所属していた機関(国立歴史民俗博物館)の共同研究として現地に赴き、これらの手紙の全ての閲覧と調査研究に取り組むことができたわけである。この経緯については、『国立歴史民俗博物館研究報告』第126集(2006年1月)に拙稿「軍事郵便の基礎的研究(序)」で触れており、また、この共同研究の研究成果は、共同研究員の協力を得て『国立歴史民俗博物館研究報告』第101集(「村と戦場」2003年3月)にまとめられているので、そちらを参照してほしい。

高橋家の調査で、私たち共同研究のメンバーが手にとって閲覧したのは、戦没学徒でもなければ特定の隊の兵士でもなく、また戦没した農民兵士だけでもない、東北の農村から出征して行ったごくごく一般的な兵士の手紙であった。実際調べてみると、高橋家自身に来ていた親族からの軍事郵便が母屋の押し入れに別置されていたことが判明し、数百通にも及ぶ軍事郵便を新たに確認することができたわけなので、7,000通をはるかに越える軍事郵便の数になったのである。新発見の軍事郵便は、私にとっては、一軒の家だけでもこのくらいの数の手紙を受け取っていたことを認識する機会ともなり、何も条件をつけずに軍事郵便の総体を考えた時、いったいどれ程の軍事郵便がまだ眠ったままの状態になっているのかに、強い関心を抱くことになったのである。

1894年の日清戦争からはじまった軍事郵便制度であるが、1945年までの50年ほどの間の、年次ごとの軍事郵便取扱い数を、私自身まだ確認ができていないが、日清戦争期では、内地から706万通、戦地から533万通、都合1,239万通余りで、これが日露戦争期になると飛躍的に

数がのび、発信が2億2,448万通余、到着が2億3,464万通余、計4億5,912万通余と膨大な数になっていることは確認できた。それでは日中戦争から太平洋戦争期には、どれだけの数の手紙が戦地と内地間でやり取りされたのだろうか。その数については、まだ未確認である。戦局が厳しくなる戦争末期には、輸送ルートの確保も困難となり、当然ながら数は減少せざるを得ないが、それでも多くの手紙が海を渡ったことは間違いのない事実である。当然ながら億の単位はあったらと推測されるが、現在、その存在が全国で明らかになっている数は、精々十数万通程度といえるだろう。億の単位からすれば、九牛の一毛に過ぎない。軍事郵便研究といっても限界があることは誰の目にもあきらかであるが、だからといって、軍事郵便研究ができないわけではない。たとえ一毛でも核たるものをそこから読みとることはできると、私は考えている。

⑤ 大学の歴史講義「軍事郵便を見る・触る・読む」

北上市の高橋家調査以来、個人的にも調査閲覧する機会が増え、次第に原史料として私の手もとに集まるようになったのである。2011年1月現在では、思いもよらずではあるが、すでに1万通をこえる数の軍事郵便を個人的に所蔵するまでになってしまった。歴史史料という観点からは、こうした個人的所蔵は決して好ましいことではないが、ヨーロッパ諸国とは異なり、日本では専門の施設や研究所があるわけではないので、止むを得ないと割り切っている。実際の戦争体験者も、次第に徴兵年齢が下げられたために従軍していった学徒兵のように、戦時中最も若かった世代もすでに80代後半の年齢になり、かつそれら肉親の手紙を大事に保管し続けてきた次世代も、後期高齢者の枠に入る時代となって、60数年間保存し続けた戦地からの手紙も、まさに“風前の灯”状態になっている状況からして、現段階では、私の個人的収集も許されると判断しているのである。

それにもう一つ、私が軍事郵便に固執するのは、大学という教育機関で、日頃10代後半から20代の若者と接触し、なおかつ日本の近現代史を教える立場にたっていることとも深く関わっている。歴史に関しての講義で学部をこえた複数のコマ数を担当しているが、その講座の中で使えないかという思いが強くなったからである。実際、私が担当している講義や文学部歴史学科の日本近現代史のゼミナールでは、もう七、八年にわたって軍事郵便をとり上げている。そして講義そのものは、「軍事郵便を見る・触る・読む」というような内容にあえてしている。2年～4年まで含めて38名もいる（2010年度）私のゼミでは、年度ごとに、特定の家の軍事郵便に絞って、解説を進めている。ゼミ員一人一人に数通の軍事郵便の現物を直接渡し、実際に触ってもらいながら、戦場からの感触を直接味わわせ、それから次に読んでみるということをしている。

私は、100名近い受講者がいる大学の講義でも同様のことをしたが、その講義の中で、「両親や兄弟に自筆で手紙を書いたことがあるかどうか」を聞いてみたことがある。ある教室では、誰一人手が挙がらず、シーンとなってしまった。この状況から「ラブレターも書かないのか」とたたみこんで聞いたのであるが、あまり手があがらなかった。これには私も大いなるショックを受けた。携帯電話そのものや携帯メール、さらにはパソコンメールなどで、数時間、あるいは数分おきに頻繁にやりとりしている光景は、大学の中では珍しくもなくなったが、自筆で書いてまで自分の気持を伝えることは、現代の若者文化にはなじまず、すっかりすたれてしまっているといえよう。この教室での問いかけ以来、自筆で手紙を親族や友人に書いたことがまったくない世代が、日本ではもうかなり多くなっているのではないかと思わざるを得なかった。

戦地にいる兵士と銃後の人々を結ぶ唯一のコミュニケーション手段である軍事郵便は、化石のようなものとなってしまった。ごく最近聞いた話であるが、現在の小学生は、手紙のあて名の書き方がまったくわからないという。さもありませんかと思う。小学生ばかりか、大学生でも怪しいものである。

そういう彼らにアナログの要素をたっぷり残している軍事郵便を講義やゼミのなかで読ませてみるという試みを、ここ何年か実践している。その成果というほどのものはまだ生み出してはいないが、講義での学生の評判は上々である。たった一枚の軍事郵便であるが、どんな戦地から、それもどんな戦況の中で、どんな思いで、誰に宛てて書いているのかを考えながら、直接葉書や封書に触りかつ読むことを求めている。そして「70年前にも及ぶ古い軍事郵便は、表書きに記された受取人以外に、今初めてまったく別の人間が読むことになり、その意味で君らが二番目にこの手紙を読むことになる」という説明をすると、それまでとは異なり、まず目の表情が変わり、解読の真剣さが増していることを、私自身なんども確認してきた。それに私の説明は、「名前のある差出人の兵士がこのまま生きて帰ってきた保証は何もない」とも付け加えることにしている。この手紙が最後の手紙かも知れないという思いを抱かせながら解読させると、より真剣に取り組むようになる。

ただ、現代の20代の学生にとって軍事郵便は、もはや近世や明治初期の文書と同様の古文書に近いものとなっており、解読はかなり難航し、四苦八苦の読み下しになるが、内容が少しでもつかめるようになると、興味は一層深くなる。兵士一人一人が、何をこの手紙で言いたかったのかを読み込めるようになると、戦争の現実を多少ともリアルに受け止められることにつながってくる。仮想の人物ではなく、氏名も所属部隊も、戦地での所在地も明らかである実在した兵士という認識を持ち、なおかつ書いてある内容もある程度読みこなせるようになると、一通一通解読できることで、より親近感がわいてくるのではないか。それも戦闘のある緊張した日とそうでない日との大きなギャップも文面を通して接触し、そこでまた困惑する事態に陥ることになる。また、実際にこの手紙を読んだと思われる親族者たちと筆者との関係性がわかれば、そこに記された具体的内容も、より一層リアルに受け止めることができるようになる。そこには、戦争の現場のもつ厳しさ、死への恐怖、生きることの重さ、血をわけた肉親や兄弟への慕る思い、なにげないふるさとの情景への懐旧、同じ釜の飯を食う仲間との強い絆、異郷の地での異体験などが、「軍務に精励しております」という決まり文句のような文に混ざって記されている。そこに記された言葉一つ一つ、一行一行に、一人の兵士の深い思いや意味が込められているような気がするのである。淡々と記された手紙こそ、逆に兵士の強い思いを感じることもある。

それは兵士からの手紙だけではない。銃後にある人々の兵士宛の手紙（これもまた軍事郵便）の中にも、共通に感じることである。「毎日の新聞を見て、さながら自分も戦地に有りて観戦するが如く、勇しい皇軍の活動がまぼろしの如く体内に湧いてきます。銃後に有る我等は、何を以て軍人諸志に報恩せん、朝な夕な神仏にたいし、皇軍の武運長久と兵隊さんのご健康をお祈り致すばかりです。皇軍万歳、戦勝を祝す」（1937年 北上市高橋家文書）。「まぼろしの如く体内に湧いてきます」とあるように、ここには同郷の兵士と共に闘う、ある種の擬似体験ともいべきものを実感している人々の姿をよみとることができる。

さらに「今日も村民一同は、神社に出征家族を先頭に、戦捷並に武運長久の祈願祭を催しました。貴君その他本村出身者の武勲及び通信を読み告げられました。何卒銃後は後顧の懸念なき様、御願申します」（1938年 北上市高橋家文書）。村あげての武運長久の祈願祭で、通信文（軍事郵便）が読み上げられたことがわかる。ここでは軍事郵便はパーソナルな関係でのやり

とりに止まらず、読み上げられることによって兵士の体験が、村人全体の共通体験となっていく様子が読みとれるのである。

同じ隊のなかには、たまにその日だけ軍事郵便が届かなかった兵士もいるが、そうした場合、他の兵士の軍事郵便が廻し読みされたという話が残っているが、これもまた情報を共有すると同時に、喜びも分かち合う関係ができていたということだろう。「坊やたちの絵や作文の御手紙、殺風景な戦地で、鬼の様な兵隊の心を慰めて呉れるものは……。天心らん漫な邪気のない小供の手紙。之位いやはらげるものはありません」(軍事郵便 国立歴史民俗博物館蔵)。こんな手紙が来ると受け取り人の兵士だけが独り占めしないで、同じ隊のメンバーに廻して、共感を分け合っていたことが推測されるのである。



軍事郵便絵ハガキ 故郷からの便りを手に笑みがこぼれる兵士たち

私は軍事郵便を読むことになった学生にはいつも、「軍事郵便を読む時は、深読みすることには心掛けるよう」指示している。文字面に現れたものだけで単純に理解してはいけないということである。軍事郵便には、検閲があるという見えないプレッシャーがかかっていることも忘れてはいけない。そこでは書くことに躊躇したこともあるだろうし、また書いて自分の気持ちを正直に伝えたかったことも、戦地からの手紙では絶対に書けなかったという現実がある。しかし、具体的に記された文面から、それらを深読みすることで、もうひとつ理解を深めることが大事だと思う。そこには何が書けなかったかを見抜く力も必要になってくるだろう。軍事郵便との格闘もまた必要なことではないかとも思う。どの手紙も総てというわけにはいかないが、時には数十通、数百通などが残っている手紙の中から、キーパーとなる手紙に注目して見る必要がある。記されていない事項を考えながら読み込むという作業もまた大事ではないだろうか。

⑥ 軍事郵便はどのようにして残されたか

次に考えてみたいのは、軍事郵便の残り方、保存のされ方である。生きて帰還した兵士たちは、戦時期および戦後、自分が戦地から出した手紙が、受取人によって大事に保管されてきた

ことを知ることになる。なかには、自分の発信した戦地からの軍事郵便を受信人に、年代や日付を入れて順番に保管しておいてくれと依頼していた例もある。軍事郵便に対しての帰還兵士たちのそうした思いは、同じ戦場で多くの仲間の死を見てきたこともあって、複雑なものがあっただろう。単に戦地でのなつかしい思い出の手紙という意味をはるかにこえたものだったのではないだろうか。一通一通に、その時の状況を思い起こせる記憶が宿っているといってもいいだろう。明日の生死も知れぬ厳しい状況の中で書いた手紙もあるだろうし、やっとできた自分だけの時間に、それも言いたいことの半分も書けなかった葉書もあっただろう。自分がその時どんな思いだったか、残されたどの手紙にも、その当時の戦場の記憶が蘇るだけのネガが焼き付けられていた。

今私の手もとに、水野淳『或る出征兵士の敗戦・復員に至る記録 私が出した「軍事郵便」』（全176頁）というそのものズバリの本がある。1996年9月に自費出版された記録であるが、戦争体験者自らが編集して発刊した貴重な記録である。

水野は、東京大学文学部卒業後、専修大学法学部を卒業し、28歳という年齢で徴兵検査を受け、その年の1941年に、新発田連隊（東部第二十三部隊）に入営して戦争に駆り出された人物である。太平洋戦争勃発と前後して「北支那派遣軍」に転属して、さらに独立混成第十五旅団第七十七大隊に配属されて、北京西郊で初年兵教育受け、そのまま中国にとどまり、机上勤務が多かったが、1944年に「支那派遣軍特殊情報部」に転属し、そのこで敗戦をむかえた経歴の持主である。「徴兵検査に行く時から、戦線に赴き生きて帰る事は無いと覚悟」（前同書）していたという。中国戦線にいた時も「生きて帰れるとは思ひも抛らない」という気持を持ちながらの軍隊生活だったという。それでも「機会ある毎に出来るだけ父母に便りをする事が唯一の孝行だと思ひ、せつせと所謂「軍事郵便」を書いた」と述懐している。その手紙は父が「到着した軍事郵便をその日の日付を書いて整理して置いて」くれたので、1941年～1945年までの4年間の413通が年代順に残っていたという。

また、水野宛に「送って貰った父母・親戚・友人等からの手紙も百通に余る膨大な量が有って、整理して綴じて手元に保存してあったが、敗戦で書類一切持ち帰り禁止の為、個人的には貴重な写真アルバムと共に残念乍ら全部焼却して復員した」（前同書）といい、「無情なる事、負ける戦争とはそう言うもの」とも言っている。戦地からの手紙は、たまたま父が整理して保存しておいたので、そっくり残ったということであるが、自分が戦地でもらった多くの軍事郵便についても、途中までは整理して綴った状態で持っていたことがわかる。しかし、日本の敗戦はそれを持ち帰る事は許されなかった。

いずれにしても、軍事郵便の発信人も受信人も、戦場にいる兵士がその時その時に、“生存している証”として受け止めていたことから、大事な証明として保存されてきたことがわかる。粗末に扱うことなど論外であっただろう。だからこそその兵士の生死に関係なく、戦後長くに渡って関係者によってひそかに保存・保管され続けてこられたのだと思う。場合によっては、筐底にしまえばなしだったものもあったろうが、それなりの数の手紙がまだ残存し続けているといえる。高度経済成長期を経ている日本であるので、住環境や家族のあり方なども大きく変貌していったはずであるが、そういうなかで軍事郵便はしぶとく生きながらえてきたのである。

水野がその軍事郵便を、一冊の本にして刊行したいと思ったのは、自分が80歳という年齢をこえ、戦後50年という歳月が経過したころであった。彼は特殊情報部で長く仕事をしてきたこともあって、戦後は「戦犯と許り白眼視される中で逼塞して暮らす事半世紀、若い時夢見た「何をか為さんずる」意気込みは今は雲消霧散、既に八十路を越えて老境に在り、気の効いた人生

観・世界観を纏めるにも至らず、些やか乍ら国家の至上命令の下、吾が一大蹉跌たる出征が物語るもの如何かを書いて、秘かなる吾が心の慰めとしたいと思った次第」と、この本の刊行の目的を記している。父が保存しておいてくれた自分の軍事郵便を手がかりとして、自分の“蹉跌”ともいえる出征、つまり失敗の歴史を、80歳になって改めて振り返ることによって確認しておこうという行為であった。本人も「未だ生きている」という合図にしかみえないといっているが、「併し良く読むと片言半句の中に当時の私の部隊の動きや私の苦悩が思い出される」と言っている。水野は自分が書いた軍事郵便の持つ力を借りて、「今次太平洋戦争が如何に無意味であったか」という視点で、戦争を総括しようとしているのである。この記録は、413通の全ての軍事郵便の紹介と若干の解説が附されたものであるが、50年後に読み直しても、ある光を放っていると思えるのである。パーソナルな手紙ではあるが、水野自身の蹉跌という複雑な感情を越えて軍事郵便がもつある種の「歴史力」は維持し続けているのではないかと私には思えるのである。

戦後50年、60年という時代を経て読み返しても、たちどころに戦争の場面が蘇ってくる。決して色あせない。時代を経てもなお光を失わないといっても過言ではない。

さらに、別の例をみてみよう。

金沢市宝船寺町の藤堂鉄太郎は、「南支那派遣軍後宮部隊古森隊辻隊」に所属する息子藤堂喜一からの手紙と葉書を、スケッチ帳のような冊ものに一枚一枚貼付して、整理していた。大事な息子からの手紙を一通たりとも紛失しないようにとの思いだったのではないか。時期は1939年のものが中心である。軍事郵便なので、年月日などが記入されておらず、正確な年代は不明であるが、日中戦争時代のものであることは確かである。こうして貼付しておけば、紛失は免れるだろう。藤堂家の軍事郵便は、戦場から届く息子の生存の証という大事な役割を果たしていたことになる。

一方、本人からの手紙もさることながら、戦場であって家族などから届いた手紙は、どのような現状にあるのであろうか。一般的には前述の水野がいうように、戦場で受け取った手紙は帰国の際に処分されてしまうことが多い。持ち帰る事のほうが少ないのではないかとと思われる。実際に現存する軍事郵便は、そのほとんどが、銃後の人々が戦場にあった兵士からもらった手紙であり、戦地の兵士が楽しみに待っていた故国からの手紙は、残りにくい状況にあった事は間違いない。戦争末期、戦況がきびしくなるにつれ、戦地の兵士に届く郵便を自ら管理保存し続ける余裕はなくなってしまったといえるだろう。本国への帰還にあたって、「できるだけ身軽にして」というような指示が出ていたという話を、二度にわたって戦争に駆り出された父から、生前に私は聞いたことがあった。

ただ、次のような事情もあることは注目しておかなければならない。

「戦地の兵隊が内地からの手紙を心楽しみに待てるさまは、子供達が「もう幾つ寝るとお正月……」と、指折り数へて待つにも増して、切ない激しい思ひが秘められてゐる。そして若い兵隊でも、老兵でも、妻の愛情をこめた手紙や、カタカナの愛児の手紙や二重丸のついた習字や、或ひは肉親の古風な巻紙の便りや、まだ一面識もない銃後の誠心こめた慰問の手紙を、みんな肌身につけて離さない。赤ん坊の写真をお守りがはりに鉄兜に入れて突撃する兵隊もある。もう何遍でも飽きることなく取り出しては読み返へし、擦れ切れ、汗に浸みてぼろぼろになっても、決して捨てるやうなことはしない。黄塵渦巻く中を、たゞ前の者の飯盒から離れまいと歯をくひしばり、たらたら汗を流し、えんえん、えんえんとしてよるけつ、涯しなく続く強行軍に、それがどれほどの重さでもないのに、それでも慰問品の封筒や便箋や襷を捨てるやうな時でも、手紙の束だけは決して捨てない。手紙はそれ

ほど貴重なものになってゐるのだ。(後略)」(木村秋生「野戦局挿話 遙かなる祖国」『通信の知識』郵便七十周年特輯 昭和16年4月)

ここで、転々とした戦場で、肌身はなさず持ち続けた軍事郵便で幸いにして故国まで持って帰れた軍事郵便の例をみてみよう。



黒紐で綴じられた軍事郵便

上の写真にある上野八郎宛の軍事郵便であるが、彼は1940年～1942年までの2年ほどの間に、「中支派遣斎藤部隊、上海警備第六部隊小林隊、中支派遣峯第八一〇三部隊」と転属しているが、その間に受け取った葉書77通を一束に括っていた。もちろん帰国してから、まとめたものだろうが、その表紙には「支那事変記念 故郷の使者」と墨書のタイトルを記していた。兄弟からの葉書が多いが、友人などもふくまれており、戦地にあつて受け取る軍事郵便は、まさに“故郷の使者”だったのだろう。兵士がどんな思いで手紙を待っていたのかが、“使者”という言葉に集約されている。

また、「北支派遣鷺津部隊澤田部隊」(のちに田中部隊磐井部隊に転属)に所属していた傳法谷義雄は、1939年秋～1941年までの二年余りの間に、青森の家から受け取った軍事郵便を、年代順に並べて綴っていた。その綴りの「はしがき」には、次の文が附されていた。

「この一綴りは、昭和十四年秋、大命を拝し征途についてから凱旋までの間に、妻から送られた書簡である。夫を大陸に送りて、女手に子供三人を見守り育て、留守をあづかりあけてくれ、戦地の背の君を思ふその苦心！！。元気でゐますご安心下さいと云ふ力強い言葉の中にも、決して戦地の苦勞にも劣らぬ辛苦が包まれてゐることを見のがすことは出来ない。文中勿論、残し置くべからざる所もあるか知れない。水も洩らさぬ夫婦の中の、しかも思ひ思はるる意中を綴った手紙の全部を集めたのだもの、無理もない。只どの手紙の中にもあふる、ばかりの夫への愛情と又武士の妻として雄々しく生きつゝある血と涙の雄々しい叫びを見落してはいけない。而してこの手紙が困難な戦地の勤務に当る夫君をして、如何に元気つけ、尊い聖戦への奮斗を促がしたか、はかり知れないのである。茲に余は留守を完全に守り、又銃後婦人の努めを完ふした我が妻に対し、心からなる感謝の意を表すると共に、出征記念として長く本冊を書架に残すつもりである。昭和一六、四、一六 於立志舎 識す」

この綴りには、132通余りの手紙がくくられている。妻からの手紙が主であるが、そのどの手紙にも、三人の幼い子供の文や絵が添付されており、妻子のいた傳法谷にとっては、毎回の開封が楽しみであつただろう。これらの手紙がいかに戦地の兵士の気持を元気づけ、奮闘の意欲を促したかは計り知れないと述懐している。だからこそ、帰還して間もなく、戦時中であるにもかかわらず、傳法谷自身がきちんと整理して、改めて受け取った日付も入れて整理し、一綴りにしてまとめたのである。「出征記念」として書架に残すとも言っている。傳法谷が生存していたからこそできた綴りであるが、子供の手紙も含めて132通も数えるが、そこには、銃後に残された妻からの戦場にいる夫への熱い想いが溢れている。

また笠原美武は、「陣中お便り綴り」と題して、母や姉あるいは故郷の長野県の女子青年団などから受け取った軍事郵便を、同じ大きさの台紙に貼り付けて、保存していた。

さらに陸軍獣医中尉の多久島幸次郎は、戦地で受け取った肉親や姉妹などからのものと、そのほかからもらった軍事郵便を、「大東亜戦争出征手紙集」と題して、一綴りにして保存していた。1941年～1943年までの二年ほどの間の手紙である。

「上海派遣軍藤田部隊」の国島二郎も、1937年～1938年にかけての郷里岐阜市からとどいた両親や兄弟、友人たちからの百通近い数の軍事郵便を一綴りにして保存していた。

以上紹介した例は、すべて私の個人的な所蔵のものであるが、軍事郵便は、このように一通ごとにばらばらにでてくるというより、綴られて発見される場合がある。

7 軍事郵便の「歴史力」——冬眠から覚めて続々翻刻

ここ十年位の間、これまで誰にも見せたことがなかった個人的な軍事郵便を、それを保管してきた個人や家族、あるいは市民団体などが、あえて翻刻する例が多くなってきた。すでにこの傾向については、前述の拙稿「軍事郵便の基礎的研究(序)」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第126号 2006年)で触れたことがあるが、その後もぞくぞくと市民や団体が翻刻している。戦後50年、60年という節目に来たことも関係していると思うが、今なぜ、まったくの個人的な軍事郵便を翻刻して本にしたりするのであろうか。

ここ三十年ほどの間に刊行されたものを、概略たどってみると以下のようになる。これらは私が気がついたものを中心なので見落とししたものも多い。近刊情報については、最近この分野の研究をメディアという視点から精力的にすすめている後藤康行氏から得た情報も含まれていることをお断りしておく。全国各地を網羅的に押えているわけではないので、実際にはもっと数は多いだろう。その意味でこのデータは完ぺきなものではないが、翻刻への大きな流れが生じていることがわかるだろう。今後もこのデータは補充していきたいと思っている。

- 1 1981 『山形・戦没兵士の手紙』昭和の山形2 山形放送報道部編
- 2 1983 『出征兵士の手紙から』——戦争を知らない世代へII⑨岐阜県
創価学会青年部反戦出版委員会編 第三文明社
- 3 1983 『七〇〇〇通の軍事郵便——高橋峯次郎と農民兵士たち』菊地敬一 柏樹社
- 4 1984 『ぐんじ郵便』真本正夫編
- 5 1984 『農民兵士の声がきこえる』岩手・和我がのペン編 日本放送出版協会
- 6 1986 『陣中通信』樋口三代吉 スガ試験機株式会社
- 7 1987 『還って来た軍事郵便——支那事変従軍の思い出』塩野雅一
- 8 1987 『とうちゃんの軍事郵便』吉田貞治 そしえて
- 9 1988 『ビルマの花——戦場の父からの手紙』福田恵子 みすず書房
- 10 1990 『ビルマ戦線からのたより』馬場英一郎遺筆集
- 11 1991 『戦場からの最後の一通』日本遺族会編集・発行
- 12 1992 『和子さんからの手紙(資料編)』砂町レポート2 関 利貞
- 13 1992 『のこりて字あり』三宅寅三・三宅千代 朝日新聞名古屋本社 編集制作センター
- 14 1993 『フィリピン戦 流転の一兵 付・軍事郵便』村越重昭

- 15 1994 『戦地より届いた家族愛——父・八木常太郎からの便り』 八木 正編
- 16 1995 『妻へ、子へ 戦地からの96通』 河崎倫代編著 北國新聞社出版局
- 17 1995 『軍事郵便』 畑 幸助 新樹社
- 18 1996 『軍事郵便』 古沢岩美 美術の図書・三好企画
- 19 1996 『一日一信 戦地から妻への1600通の葉書』全4冊 青木 一 大空社
- 20 1997 『戦場から妻への絵手紙』前田美千雄追悼画文集 高澤絹子編 講談社
- 21 2000 『戦場からの絵手紙 父は悲しも』 敷島妙子・田中祐子編 発行・サンメッセ株式会社企画出版部
- 22 2002 『戦地からの手紙』旧満州・中国中部 黒澤 隆
- 23 2002 『月刊絵手紙8月号——特集戦下に遺されたいのちの記録』 日本絵手紙協会
- 24 2004 「一兵士の“ビルマ便り”を読む——小泉博美の103通の軍事郵便研究」 専修大学新井勝紘ゼミナール 『専修史学』37号
- 25 2005 『太平洋戦争で逝った父から子へ——終戦60年目に見つかった150通の軍事郵便』大塚茂夫「NATIONAL GEOGRAPHIC」05/11
- 26 2005 『戦地からの手紙 I』 鍋木正義から家族宛325通 豊島区立郷土資料館調査報告書
- 27 2005 『戦地からの手紙』市川甚兵衛・スゝ往復書簡集 市川紀行編著 筑波書林
- 28 2006 『栗林忠道 硫黄島からの手紙』 栗林忠道 文藝春秋
- 29 2006 『戦場からの手紙』 伴 一 発行・新城周子
- 30 2007 『百七通の軍事郵便』 山口ひとえ 文芸社
- 31 2007 『ツルブからの手紙』 小林喜三著 小林征之祐編 新日本教育図書
- 32 2007 『軍事郵便』 赤松宜子 『原点』94号
- 33 2007 『戦場への恋ふみ』 遥かな日の叢書7 成沢潤子 八島信雄編集発行
- 34 2007 『翻刻資料集3 日中戦争派遣兵士の軍事郵便』 相場長衛の軍事郵便135点 国立歴史民俗博物館
- 35 2008 『戦地からの手紙』 金子国輔
- 36 2008 『父の戦地』北原亞以子 新潮社
- 37 2009 『手紙が語る戦争』 女性の日記から学ぶ会編 島利栄子監修 みずのわ出版
- 38 2009 『戦地から土佐への手紙』 高知ミモザの会編・発行
- 39 2009 『戦地からの手紙 従軍日記』 貞長袈裟則 リーブル出版
- 40 2009 『七十三年目に封印を解いた父の手紙』 山下芳子 文芸社
- 41 2009 『野戦病院——渡邊榮一遺稿集』 渡邊榮一 発行・渡辺力栄
- 42 2009 『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』 専修大学文学部日本近現代史ゼミナール編 SILibretto003 専修大学出版部
- 43 2009 『ジュンちゃんへ……戦争に行った兄さんより』 武田信行編 風媒舎
- 44 2010 『家族への軍事郵便』 今地千鶴子編・発行
- 45 2010 『君よわが妻よ——父石田光治少尉の手紙』 石原典子 文藝春秋
- 46 2011 『大場榮と峯子のラブレター』 水谷眞理・竹内康子編 これから出版

※なお、翻刻の出版以外にも全国各地の自治体史などに軍事郵便が紹介される例が、増えてきているという西村健氏の研究報告がある。

この翻刻・出版ラッシュはということなのだろうか。自費出版も多いが、大手出版社が刊

行しているケースもある。これまで数十年の間眠っていた軍事郵便が、今まさに冬眠から覚めて、地上に這い出してきたという感じである。21世紀に入っても、その勢いはおさまらない。むしろ2000年代に入ってから、急増しているともいえるだろう。

ここでは個々の内容分析はできないが、ともかく、今こうして戦場からの手紙が改めて翻刻される流れをみると、翻刻を実践したそれぞれにとって、戦後の60数年という歳月は問題にならないのである。この間にさびついたりとか、旧型になってしまったというようなことではなく、軍事郵便を改めて読み直してみても、ある力を持っていることが実感できたからこそ、翻刻に踏み切ったのだらうと思う。また、今そうしておかないと、これまで保存してきたような環境はなくなり、そのまま廃棄や死蔵したまま終わってしまう状況が間もなくやってくるという危機感があったことも、翻刻を押し進める動機となったのではないか。「私が生きている間はなんとか保存してきたが、子供や孫、さらにひ孫の世代になれば、古びた戦前の手紙などは反故にされることは目に見えています」という話をよく聞く。世代交代とともに、消滅することになれば、戦争体験者が間もなくいなくなり、その子供達も高齢化している現状からみて、軍事郵便の保存保管は、今呼びかけないと取返しがつかない状況に追い込まれているといってもいいだろう。自分が生きている間に、子供や孫たちになんとか伝えておきたいというふつふつとした心情が、翻刻の動きの底流にあることは言えるだろう。

父の亡くなった南の島ツルブまで慰霊にでかけ、そこで初めて「父さん」と叫び、当時三歳だった自分に残してくれた自筆の絵ハガキ43枚を、翻刻することによって、ようやく終戦を迎えることができたのは、『ツルブからの手紙』を翻刻した小林征之祐である。上記の46点のどの翻刻も同じことがいえるのではないだろうか。これらの軍事郵便は60数年間にわたって、「歴史力」を維持し続けてきたからこそ、翻刻を、次のように意味づけることができるのである。

「家族とは何か、戦争とは何か、国とは何かと、そして二十一世紀を生きる我々すべてに恒久の平和の為に人は何をなすべきかを問い掛けている。」

(井手久美子 『ツルブからの手紙』 おわりに)

私は軍事郵便のこの「歴史力」を評価したい。今もう一度、ごくごく一般の兵士の手紙に注目するのはこの理由からである。

8 「軍事郵便文化」の形成の視点

最後にもう一つ触れておきたいことがある。それは、日本の国民がある時期に集中して億の単位の手紙を書き、それを一定のルートに乗せて、海を越えて届けられた歴史から、何も生み出さなかったのかという問題である。戦争という平常ではない状況という条件を勘案しても、なお、一般の兵士が、普通の家族が、これだけの量の手紙のやりとりを行った時代はないだろう。一度たりとも手紙など書いたことのない兵士が、数十通から数百通に及ぶ手紙を海外から出し、自分のふるさとも同時に、ほぼ同じ量の手紙を受け取ったという歴史的事実は、確認できる。それもごくごく特定の人物や階層に限られてのことではない。若い男子がいる家庭なら当然であるが、家の親戚親族も含めて、戦争に駆り出されていない家はないだろう。戦争・兵士というキーワードで検索すれば、当時の日本のほとんどの家庭にヒットするだろう。となれば、どの家にも多かれ少なかれ、軍事郵便が届けられた筈であるし、また受取人ではなく、銃後からの差出人という立場に、誰ももれなくたつたはずである。年齢も子どもから大人まで、さらに男も女もなく、社会的身分の相違もなく、おしなべて軍事郵便の世界に没入したの

ではないだろうか。軍事郵便はそれだけ裾野も大きく広がっていたとすることができる。戦場が国外ということを考えれば、国内外にも広がりを見せたといえる。

この経験はいったい私たちに何も残さなかったはずはないというのが、私の今考えている問題である。軍事郵便の歴史的、社会的意味とこの世界に入りこんで実践した国民的経験は、私たちに何か残しているはずだという思いは、軍事郵便を読むたびに考えて来た。

その歴史的整理についてはまだ模索中であるが、いくつか考えていることがあるので、ここで若干触れておきたい。

- 1 軍事郵便を書いた兵士の、手紙やはがきを書く行為そのものの体験。その蓄積。
 - 自分の心情を文章にして表現し、肉親や家族に伝えることの初めての実践。
 - 文章表現の上達が伴ったのではないか。数多くの軍事郵便を残した兵士の手紙を読むと、次第に文章が練れてきていることがわかる場合が多い。
 - この経験は、戦後の社会に生きる私たちにもつながってきているのではないか。
 - 場合によっては日本人の識字率にも影響があるのではないか。

- 2 文章表現すると同時に、自分の絵を添えて葉書にして出した例。
 - 画家そのものだったり、画家を志していた人もいるが、ごく一般的な兵士の中にも、戦場で見聞きしたものをスケッチしている例もある。
 - 戦場の見聞をたとえ拙くとも絵に表現する経験。
 - 戦地であるアジアへの認識
 - 今日の「絵手紙」の原点

- 3 軍事郵便特定の大量の絵葉書の作成
 - 従軍画家だったり、著名な人もいるが、軍事郵便の中で絵葉書の存在は大きい。
 - 画家はどのように動員されたのか。
 - 絵以外に写真も多い。どんな写真家が動員され、何を題材にしたものが多いのか。
 - 軍事郵便の中の絵葉書の総体を把握する必要があるだろう。
 - どんな絵が好まれ、どんな絵に癒されたのか。

- 4 軍事郵便制度普及のためのさまざまな施策
 - ①全国の各局で出された普及のためのパンフレット作成
 - 「軍事郵便の上手な出し方」 東京都市通信局
 - 「軍事郵便差出人心得」 ガリ版刷り
 - 「軍事郵便案内」 熊本通信局
 - 「兵隊さんの楽しみは？——新版「軍事郵便」案内——

戦地に働く兵隊さんに故郷の便りを出ませう。兵隊さんの一番の楽しみはお国からの郵便物を受け取ることです。ほんの一通の手紙が、たった一箇の小包が、どんなに戦線の勇士を歓ばせ、また元気づけるかは、皇軍慰問から帰られた方々の、口を揃へて説いているところです。それにも増して、兵隊さん自身が異口同音に訴へて来てをります。——「皆さん、弾丸のやうにドンドンお便りをブツ放して下さい！」と。まことに軍事郵便こそ、遥かなる戦線と吾等の銃後とを結ぶ力強い祖国愛の絆です。 昭和一四年十月」

- ②軍事郵便をメインにした展示会の開催
 - 「軍事郵便と航空安全展覧会」(1938)
 - 「興亜の先駆 海・陸・空 躍進通信大展覧会」(1939 大阪高島屋)
- ③普及・案内のためのポスターの作成 「今こそ送れ軍事郵便」
 - 「包装はシッカリ、名前はハッキリ」
- ④映画の作成 「軍事郵便」(芸術映画社)
 - 「支那事変軍事郵便記録 郵便部隊」(通信博物館製作)
- ⑤歌・レコードの製作 「軍事郵便」(1937年 ポリドール 歌手・東海林太郎)
 - 「明朗通信」(ポリドール 歌手・桜井健二・きみ栄)
 - 「野戦郵便の歌」(作詞・坂本虚風 作曲・弘田龍太郎)
- ◎ 通信協会撰定「野戦郵便の歌」
 - 作詞 坂本虚風 関 佐々木信綱 作曲 弘田龍太郎
 - (1) 国を發つ時奉公を 誓って固く握手した あの思い出がはっきりと
今大陸を 通信の 旗と進めば 胸に湧く
 - (2) 巖も溶ける夏の日に 脛まで入った泥濘を 越えて誉の鉄かぶと
訪ねもとめる 通送に そゝぐは憎い 敵の弾丸
 - (3) 山河も凍る冬の日 橋も壊れたクレークを 泳ぎ涉ったその時は
曠野の土に 陽が落ちて 前途はすでに 暗かった
 - (4) すっかり荒れた山路を 夜行続けて明方に 目ざす部隊に着いた時
大通信旗 打ち振って 思はず東天を 拝んだぞ
 - (5) 慰問袋や郷土の手紙 無事に届けた塹壕で つよい勇士と抱き合って
涙こぼした 感激は 我等ばかりが 知るものぞ
 - (6) あゝ身に負へる大使命 軍靴音ひゞきゆくところ 日の丸高くゆくところ
大地の果も いざゆかむ 我等野戦の 郵便隊 我等誉の 郵便隊
- 『通信の知識』第4卷4号(通信博物館 1940)
- ⑥小説の登場 『軍事郵便』河内仙介 第11回直木賞 1940上半期
- ⑦『通信の知識』・「通信たより」などの郵便関係雑誌やミニコミの発行

5 軍事郵便専用郵便書簡・便箋のデザイン

- ①軍事郵便専用郵便書簡
 - 「心の糧・感謝便箋」として月刊で発行、この中に通信と題して記事が掲載
(例 十一月通信)
 - 1頁 ボクノ・アタシノハガキ・五行均一なんでも屋・「心の糧・感謝便箋」
表紙「軍事郵便」(切手五銭)
 - 2頁 十一月通信・大御心(明治天皇御製)・朗誦二題・(読み物)農村の秋
 - 3頁 国民教化と第一線・随想愛國百人一首・俳句にあそぶ・父の言葉
太郎の休日・花子の日記
 - 4頁 21行の罫線あり 余白あり(ここには、写真、雑誌の口絵、スケッチ、
子供のかいた絵、寄せ書又は社寺の御朱印などを！)
- ②絵や標語などが印刷された便箋の普及
 - 戦時特有のさまざまな便箋が販売される

以上のように、軍事郵便をめぐるこうしたさまざまな動きを、総合的、社会的にとらえてみると、そこには一つの文化ともいえるものが生まれていたのではないかと思う。私はそれを「軍事郵便文化」の形成と、とらえたい。私自身その全貌、総体をまだつかみきれていないし、その実態も把握していない分野も多いが、今後、残されていた軍事郵便の一通一通の解読とその中身の分析検討と同時に、8年間に及ぶ日中戦争期の軍事郵便をめぐる国民的体験を、「軍事郵便文化」の形成という視点で、もう一度再検討し、軍事郵便研究の再構築にチャレンジしてみたいと考えている。

なお、ごく最近、小野寺拓也氏が、第二次大戦期にドイツ軍兵士が書いた膨大な野戦郵便を分析、研究した学位論文『イデオロギーと「主体性」——第二次大戦末期ドイツ国防軍兵士の野戦郵便』をまとめられた。国際比較という視点も大事になってくると思われる。

(あらい かつひろ 専修大学教授)